

Chim ↑ Pom ↓ 《原爆の図》

岡村 幸宣

昨年一二月一〇日から一八日にかけて、丸木美術館でアーティスト集団 Chim ↑ Pom (チン・ポム) による展覧会「LEVEL7 feat ヒロシマ!!!」が開かれました。Chim ↑ Pom といえば、二〇〇八年一〇月に広島の上に飛行機雲で「ピカッ」という文字を書き、騒動となったことで知られています。また、昨年五月には、渋谷駅にある岡本太郎の壁画《明日の神話》の右下隙間部分に、福島第一原発事故を描いた絵を設置して再び物議を醸しました。

そのため、丸木美術館内でも、当初は展覧会を開催すべきか否か、意見が分かれました。しかし、最終的には、亡き針生一郎館長が、「ピカッ」騒動の直後に発表の場を失って落胆していたリーダーの卯城くんに対し、「うち(丸木美術館)でやってもいいよ」と言い残していたことが尊重され、開催が決定したのである。

とはいえ、予算のない展覧会。彼らは展示費用を賄うために、メンバーの水野くんが原発事故現場に出稼ぎに行くという案を思いつきました。その結果、この展覧会には「Produce by 水野俊紀(東京電力)」という但し書きがつくことになりました。Chim ↑ Pomらしい企みです。水野くんは仕事の隙に、作業員姿で無惨に壊れた四号機にレッドカードをつきつけた写真を極秘で撮影

し、その画像は丸木美術館の正面にバナールとなって飾られました。《原爆の図》のある美術館で、Chim ↑ Pom が「ヒロシマ」から「フクシマ」まで核を主題に制作してきた作品を初めて一堂に集めて展示する……情報はネットを通じて広がり、入場者は日を追って増えていきました。最終日には会場から人があふれ、一二月という悪条件にもかかわらず、(丸木美術館にとっては一年でもっとも重要な行事である)八月六日のひろしま忌より多くの入館者数を記録しました。ほとんども、今まで丸木美術館を訪れたことのない若者層です。嬉しい反面、正直なところショックを受けました。丸木美術館のような場所には、若者たちが大挙して訪れることはないだろうと諦めていたけれど、そうではなくて、訪れたくなるような企画をしてこなかっただけなのだと思います。

もっとも、それでも Chim ↑ Pom の作品を好きにはなれない、という声丸木美術館の一部の関係者から聞こえてきたのは事実です。とりわけ、映像作品《ヒロシマの空をピカッとさせる》に対しては、人間の痛みに対する想像力が欠けている、という手厳しい、しかし極めて真つ当な感想が寄せられました。

米軍占領下の時代に、いち早く被爆者の姿を描き、人びとに伝えたことで知られる丸木夫妻の《原爆の図》と、Chim ↑ Pom のあいだには、六〇年という大きな歳月の隔たりがあります。

丸木夫妻が米軍の弾圧に立ち向かい、検閲制度によって隠されていた被爆者の痛みを露わにしたのに対し、Chim ↑ Pom には立ち向かうべき相手はいません。いや、対峙したのは六〇年という歳月であり、露わにしたのは忘却だったのかも知れません。広島に「ピカッ」という文字を書く、挑発的ともとられかねない

行為に対し、あまりにもどかな映像のなかの広島風景。

六〇年以上前の人びとの痛みになづくとうという発想は、おそらく、彼らにはありません。それは彼らが言うところの「Chim → Pomらしさ」ではないでしょう。彼らがこだわっているのは、自分たちが肌で感じられるリアリティ。そこから広島を見つめるところ見える、というのが《ヒロシマの空をピカッとさせる》だったのだと思います。それが本当にわかってきたのは、福島原発事故後の彼らの活動を見てからでした。自身の目で確かめるために無謀にも原発事故現場に近づいたかと思えば、福島若者たちに対しては、「支援」や「癒し」を与えるのではなく、共に生きる、という立ち位置で肩を組みながら絶叫する。広島に向かう姿勢と、福島に向かう姿勢は、明らかに違っています。彼らは福島には近づける。だから迷わず接近していく。けれども、広島には近づけない。近づけないのに近づくとふりは彼らにはできない。

丸木夫妻と Chim → Pom のあいだに流れる歳月は、そのまま表現の違いにもつながり、その落差はめまいがするほどです。しかし、それでも立场上、私はどうしても両者を比較してしまいます。すると違いだけでなく、共通点がいろいろと見えてきました。

どちらも、社会的主題に対峙し続けていること。これは日本の芸術家には珍しい姿勢と言えるでしょう。集団（共同）制作という共通点が関わっているのかも知れませんが。今回の展覧会でもっとも感心したのは、唯一の女性メンバーのエリイちゃんから聞いた、「二人いればもう社会だからね」という言葉です。集団制作は個人の内面表現にはなりえないから、必然的に社会に向かつて開かれていく。丸木夫妻も共同制作ではほとんどすべて社会的主

題の作品を描いているのですが、その理由が、Chim → Pom とのつながりで初めて見えた気がしました。

もうひとつ、どちらも原爆作品を発表した際に賛否を呼び、「被爆者の声に後押しされて」制作を続ける決意をした、と語っている点も気になります。「これは私たちの絵なのだから、描き続けてください」と展覧会場で激励されたという丸木夫妻はもちろん、Chim → Pom も「ピカッ」騒動の際に被爆者団体に「謝罪」に訪れ、「へこたれないで作り続けなさい」と叱咤されているのです。被爆者と言っても、個々の意見は多様なはずですから、本当は全体でくくってしまうのは不自然なはずですが、「被爆者の声」という言葉から否応なしに感じてしまう「正しき」を、どうとらえたら良いのか。それは、《原爆の図》を展示する美術館の学芸員としては、深く重い問題です。

卯城くんに丸木美術館での展覧会の開催希望を伝えられたときから、私は心のなかですと「やってみたい」と思っていました。それは、さまざまな不安はあるにせよ、Chim → Pom の作品が、原爆表現の多くが背負っている、そしてこの美術館で私を感じ続けてきた（語弊があるかも知れませんが）どうしようもない「正しき」——、予定調和の息苦しさを、彼らは平然と揺さぶり、突き抜けていくのではないかと、という期待があったからです。

そんな彼らでも、「被爆者の声」という「正しき」によって自分たちの道を舗装しなければならなかったのか。結局は予定調和に回収されてしまうのか。「正しき」と「危うさ」の境界線を疾走し続ける彼らの活動を、ともあれ私はこれからも、ヒリヒリとした思いを感じながら、見続けていくことになるのでしょうか。